

令和5年6月の研究会曲目～能楽雑感（165）

我が国の中世は、平安時代後期から戦国時代初期にかけての時代（11世紀後半から16世紀後半）。この期間に、能楽（1363年、世阿弥生まれる）、狩野派絵画（室町時代）、茶道（1522年、千利休生まれる）など、今日も息づいている数々の文化が花開きましたが、一方で、権力争いと戦乱が絶えない時代でもありました。

こうした激動の時代の中で、逞しくも美しく生き抜いた女性像の多くが、能の中にも登場しています。今回はその中から、白拍子など権力者に侍りながら存在感を示した女性達に焦点をあててみました。

仏原（ほとけのはら）

仏御前は平清盛に愛された舞姫。先輩の祇王、祇女への寵愛が自分に移ったことを心苦しく思い、故郷に引退した心優しい女性。

現世の栄達よりも、輪廻転生、来世の安寧を願う仏教哲学を能の形で描いて見せたものであると思います。

徹頭徹尾、清らかで純真な仏御前の心情を、整った詞章で世阿弥は綴っています。品格はあるけれど整い過ぎていて演劇的な刺激に乏しいことは否定できません。曲趣としても、起伏や曲折に乏しいように思われます。

それにも拘わらず、この謡が一級に格付けされているのは何故か。

私は、あくまでもまっとうな透明感を出して欲しいとの作者の意図を感じます。

謡としても能としても、てらい無く、雑念を捨象した透明感を出すことが如何に難しいことか。

熊野（ゆや）

平宗盛の愛人の立場にありながら、病床の母親を見舞うために休暇を願い出た才女。巷間、最たる人気を持続してきたこの曲は、孝行心とインテリジェンスを備えたシテのキャラに依存しています。勿論、お膳立ても、曲趣も飛び切りの優れもの。

謡どころ、聞かせどころは、3カ所。

まずは「文の段」、次いでロンギ（道行）、更に、名調子のクリ、サシ、クセ。

それぞれの曲趣が異なりますが、底流をなすのは、親のことを思いやる子の心情です。

中でも、ロンギは、絢爛たる花の都の名所を謡いこみながら、シテの心情をおもんばかりで、沈んだ謡にしてしまうこともあり得ます。

後半は、やや重苦しい雰囲気です。宗盛が花見に浮かれて詠んだ歌に対して、とっさに自らの心境を返歌に託したシテの教養、賢さのゆえに、瞬時にして明転。爆発的な解放感に溢れ出してきて、この部分も謡いどころです。

先日のこと、この最後の謡に出てくる、「木綿附の鳥」とは、如何なる鳥か、が論議的となりました。正解は「鶏」。その理由は又の機会に・・・。

江口（えぐち）

往時、歓楽の巷であった江口の里の遊女が主人公。

この曲のテーマは、「仏原」と同様、徹底した現世の無常観と来世への希望。

遊女が、最後は菩薩となって昇天するのですから、これこそ草木国土悉皆成仏を教えとする仏教思想の真髄です。

全編を貫いているのは、「無常観」。

特に、クセはそれが徹底していて、謡う都度、胸を締め付けられるような、やるせなさを感じます。

クセと異なり、キリには救いがあるので、お弔いの際に死者を送る謡としての定番になっていることはご承知の通り。謡をたしなむ人は、この一節を諳んじておきましょう。

後場では待謡の後、いきなりの地謡には驚かされます。能では、三人の美形が、しずしずとこの謡にあわせて舟に乗って登場しますが、華やかでありながら、ちょっと哀しい風情を醸し出しています。舟は、現代の屋形船で、彼女たちの職場です。

松浦佐用姫（まつらさよひめ）

山上憶良が彼女を詠じた歌が万葉集に掲載されているのだから、中世ではないが、白拍子（この時代に白拍子という名詞があったとは考えられないが・・・）ということになっているので採択しました。

松浦佐用姫は、「待ち焦がれる」の「枕詞」的な代用詞ともなっていて、江口や俊寛の詞章にも出現します。

テーマは極めて下世話なものです。

クセなど、さながら「危な絵」を見るようですが、そこは、能楽のことですから、艶（えん）でありながら格調を維持しながら謡いたいです。シテの力量が問われるところ。

技巧としての難易度は、後場の方が高いのですが、今回は連吟なので前場のみ。それでも、お役、地謡共に謡い甲斐があると思います。

千手（せんじゅ）

犯罪者でありながら、貴人の平重衡を遇するに、歌舞音曲にたけた千手前がお役を任じられます。

政子は嫉妬深かったと言われていいますから、頼朝の側室ではなかったのでしょうか、彼女のような出自がはっきりした女性が大勢いたに違いありません。現代のコンパニオンか。

千手前は、心優しい人で、重衡の処刑後、その菩提を弔うために終生を捧げたと伝えられます。

謡も、その辺のところを意識したらどうでしょうか。

聴き所、謡どころは、たくさんありますが、謡の技巧として最も注目すべきは、シテ謡ではなく、三丁裏、ツレ・重衡の述懐（独り言）でしょうか。

この曲は、悲劇以外の何物でもありませんが、ここの謡がその序章となります。

クセは二段クセですから、三つのパートに分かれますが、最初は重衡の不運を語る嘆き節、中間は道行ですからやや明るく、最後（三番目のパート）は高らかに悲しさを謡いあげます。

本曲の特徴は八丁裏のシテ、ツレ、ワキの三人の連吟でしょうか。「俊寛」と違って、こちらは、不遇の境遇をしみじみと謡いあげます。歌声が少々不揃いでもよいのではないかと思います。

船弁慶（ふなべんけい）

前シテの静御前は、ご存じ、源義経の愛妾。

母親の磯禪師も白拍子でしたから、二世白拍子。舞の名手だったと言われていいますが、納得できます。

義経の運が傾き始め、頼朝軍勢の追跡を逃れるための逃避行を余儀なくされる最初のこ

ろのお話で、義経としては唯一の心の安らぎどころであった静御前との別れがテーマになっています。勿論、嘆き悲しむのはシテの静御前ですが・・

後シテは、義経に滅ぼされた平家の猛将、平知盛で、子方の義経と丁々発止、ヴィジュアルな修羅劇を演じますが、この能（謡）の、実質的な主役は、前後を通じて活躍するワキの弁慶ではないかと思えます。

それと、子方の義経も重要なパートを担います。

要するに、主役が大勢いて、賑々しく、且つ、別離の悲しみと、亡霊の修羅ごとを織り込んだ、欲張った筋立てで、いかにもキリ能にふさわしい。

地謡もてらいを捨てて、存分に謡いあげましょう。

以 上